



「森井先生のこと」(その2)

真崎 隆治

森井先生のお蔭をいかに多く蒙ってきたかは前回に書いたことでも明かだが、まだまだそれくらいでは終わらない。しかしここでは先生がふだんにはお見せにならない面をいくつか思い出すままに書いてみたい。

先生が49歳という記憶があるので、私が明学に来る以前、バッハ合唱団の合宿でのことだと思うが、豊かな自然のなかで若い団員たちと缶蹴りに興じている先生の姿を目にしたことがある。当時30歳の私からみれば、49歳というのは十分に「年寄り」といってよく、その年寄りが嬉々として、「疾風のごとく」とは言わぬまでも、脱兎のごとく駆け出すのに啞然としたことがあった。もし謹厳実直な研究者としての姿ばかり見ていたとしたら、尊敬はしても、いまあるほどの親しみは抱けなかったであろう。人間とは面白いものだ。表に見えるものがいかに偉大でも、それだけでは面白くなく、その裏にそれとはまったく異質なものを隠し持っている、その人の存在が豊かなものに感じられるのである。つい先日お会いする機会があり、缶蹴りの思い出話をしたところ、「(八ヶ岳の麓にある別荘で散歩していて)今でも道に石ころが落ちていると蹴飛ばしているんですよ」といわれた。ものを蹴飛ばす習性があるって缶蹴りがお好きだったのか、それとも、缶蹴り好きが習性となっていてまだに石を蹴飛ばしておられるのかと、おかしくなった。先生はこの10月で86歳になられた。正真正銘の年寄りである。しかし、心はいまだに若い。

森井先生はアメリカ嫌いである。もっともフランスの文学や思想に触れている者はおおかた

アメリカ嫌いなのだが、先生のは筋金入りである。ある夜中、お宅に泥棒が侵入した。それに気づいて、声をかけて話しあっているうちに意気投合し、夜を徹して語りあかすことになった。なぜ意気投合したかという、この泥棒氏がアメリカ嫌いなのであった。しかしこの話は何度も聞かされているうちに、作り話であることが分かってきた。なぜなら、話のたびに細部が付け加わり、「見てきたような嘘」であることが歴然としてきたからである。後に、なぜあんな話をされたのですかとうかがうと、答えは「なにしろあのころは閑でしたからねえ」であった。泥棒もアメリカ嫌いにしてしまう先生である、アメリカの象徴のようなコカ・コーラを飲まないのは当然であった。ところがある日、ファンタ・グレープをおいしそうに飲んでおられたので、「先生それコカ・コーラの会社のです」とお教えしたら、「いけねえ」といわれて、以後ファンタも飲むことがなくなった。なんだか余計なことをしてしまった気がしている。

アメリカ嫌いといっても、もちろんアメリカのすべてが嫌いというのではない。アメリカにもすぐれた人々があり、すぐれた文学や音楽があり、大きな自然がある。しかし、自らを民主主義のチャンピオンとし、世界の正義をただひとり体現しているかのごときの姿勢を容認されないのである。過去にヴェトナム戦争があり、今にイラク戦争がある。正義の名のもとに行われる不正義を先生はもつとも憎まれる。いつの時代にもそうしたことはあるが、とりわけ先生が専門になさっている宗教改革の時代には、正義の名による不寛容が支配的であった。ジャン・カルヴァンの研究家でありながら、どこかカルヴァンを疎ましく感じておられるのも、カルヴァンが語る神の正義が人間に不寛容を強制しているとお考えになってのことではないかと思う。ほんとうのところはどうなのか？この問いにたいする先生の出された答えが近著『ジャン・カルヴァン ある運命』であるといえよう。

(続)

(まざき たかはる 所員・教養教育センター教授)